

否認可能性の多様性について

藤川 直也 (Naoya Fujikawa)

東京大学

話し手がある発言によって何かを意味しつつ、そう意味したことを後になって否認することがある。たとえば、話し手が、「なんかオフィスの空気がこもってない？」と言うことで、外の空気を吸いに行こうと言外に誘ったとしよう。聞き手はその言外の意味を正しく理解した上で、「今手が離せなくて、ごめん」と断ったとする。話し手は、断られたことが気まずくなって、「あ、そういうつもりじゃなくて、ただちょっと窓を開けるのはどうかと思って」などと言いつつ言い訳するかもしれない。意味の否認にはこうした明示的な否認ではなく、単に意味したことなどなかったかのように振る舞うことによる非明示的な否認もあるだろう。近年、どのような場合にこうした否認が可能かどうか、つまり意味の否認可能性の条件という問題が注目を集めている(cf. Pinker et al. 2008, Camp 2018, Dinges and Zakkou 2023, 藤川 2022)。

本発表では、否認可能性には多様性があり、この問いには複数の答えがあると論じる。具体的には次の二つのことを論じる。

第一に、否認可能性には認識的に特徴づけられるものだけでなく、認識的でない仕方で特徴づけられるものがある(藤川 2022、藤川 近刊)。認識的な否認可能性とは、大まかに言えば、意味したということが聞き手にはわかっていない、あるいは意味したというのが誤解ではないということが聞き手にはわかっていないなら否認を容認すべし、という認識的な規範によって特徴づけられる否認可能性である。この考えを敷衍して、意味が否認可能かどうかを、意味したことを話し手が後になって否認したとき、その否認が容認されて然るべきかどうかによって特徴づけることにしよう。さて、このように考えたとき、上述の認識的な規範は、否認可能性を基礎づける一つの重要な規範であるものの、唯一の規範ではない。とりわけ、意味したのが誤解でないということがわかっているにもかかわらず、意味の否認の容認をふさわしいものにするような規範が存在する。

第二に、この立場を、Dinges and Zakkou (2023)の立場と比較する。Dinges and Zakkou (2023)は、認識的でない否認可能性を手出しできなさ(untouchability)と呼び、否認可能性と区別する。しかしながら、認識的なものとそうでないものを共に否認可能性とすることには、単なる言葉の使い方に尽きない理論的・実践的な理由がある。そうした理由の一つとして、否認可能性の多様性は発言に基づいた帰責の実践に埋め込まれている、ということを経験することができる(藤川 近刊)。意味が否認可能かどうかは、発言によって話し手が何にどのようにコミットすることになるのかを左右する(Pinker et al. 2008, Camp 2018, 三木 2019)。たとえば、返済を迫る借金取りに「明日にはまとまったお金が入ります」と言って、明日の借金返済を暗に約束した人が、その発言によって借金返済にコミットしたことになるかどうかは、その約束が否認可能かどうかによって左右さ

れる（コミットメントをうむ言語行為は約束だけに限らない。主張に伴うコミットメントについては Brandom 1983, 発語内行為一般とコミットメントの関係については Geurts 2019 を参照）。ここで注目すべきは、発言によって何にどんなコミットメントが生じるのかの基準として、どの否認可能性が用いられるかは、場面に依りて異なりうる、ということだ。確かに認識的な否認可能性は多くの場面でコミットメントの有無を決める基準として使われる。他方で、認識的な基準では否認可能でないにもかかわらず、別の基準のもとでは否認可能であり、後者に基づいて、発言にあるコミットメントが伴わない、ということもありうる。このように、発言に基づいた帰責の実践には、否認可能性の多様性が埋め込まれており、多様な否認可能性を認めることで、意味の否認可能性と発言に伴うコミットメントの関係をうまく捉えることができる。

文献

- Brandom, R. 1983. Asserting, *Nous*, 17(4): 637-650.
- Camp, E. 2018. Insinuation, common ground, and the conversational record, in Fogal, D., D. W. Harris, and M. Moss (eds.) 2018. *New Work on Speech Acts*, Oxford: Oxford University Press, pp. 40-66.
- Dinges, A., and J. Zakkou 2023. On deniability. *Mind*, 132(526), 372-401.
- 藤川直也 2022. 意味の言い抜け可能性/否認可能性——三木からの応答への応答. 『哲学論叢』(50), 13-33.
- 藤川直也 近刊. 『誤解を招いたとしたら申し訳ない——政治の言葉／言葉の政治』
- Geurts, B. 2019. Communication as commitment sharing: speech acts, implicatures, common ground. *Theoretical linguistics*, 45(1-2), 1-30.
- 三木那由他 2019. 『話し手の意味の心理性と公共性——コミュニケーションの哲学へ』, 勁草書房.
- Pinker, S., Nowak, M. A., and J. J. Lee. 2008. The logic of indirect speech. *Proceedings of the National Academy of sciences*, 105(3), 833-838.